

# DISCUSSION PAPER SERIES

Centre for New European Research

21st Century COE Programme, Hitotsubashi University

043

非暴力・幸福・健康

—”The Dalai Lama in Hamburg 2007” に見る現代の  
チベットイメージ

久保田滋子

February 2009



<http://cner.law.hit-u.ac.jp>

## Copyright Notice

Digital copies of this work may be made and distributed provided no charge is made and no alteration is made to the content. Reproduction in any other format with the exception of a single copy for private study requires the written permission of the author.

All enquiries to [cs00350@srv.cc.hit-u.ac.jp](mailto:cs00350@srv.cc.hit-u.ac.jp)

久保田滋子<sup>1</sup>

チベットは20世紀の半ばまで、宣教師、旅行者、学者、登山家、外交使節など、わずかな人々を除いて、西洋と直接のつながりをもってこなかった。しかし、あるいはそれゆえに、さまざまなイメージが生産され、それは現在でもなお継続している。本論では、2007年7月にドイツで開催された、ダライラマの説法を中心としたイベント ”The Dalai Lama in Hamburg 2007” を事例にして、チベットが現在どのようなイメージや考え方とつながりを持っているのかを示し、最後にそれが世界各地に散在する在外チベット人の社会的存在を支え、経済的基盤を作っている点について考察する。

## 1. 成功した難民

「パレスチナ、ルワンダ、ビルマ、北アイルランド、東チモール、あるいはボスニアと異なるチベットの苦境は、仏教を熱心に実践する幸福で温和なチベット人像と、神の王によって治められ、孤高でエコロジーに啓かれた彼らの住む国が、邪悪な力によって侵略されたと思われる点にある。これは異国情緒と精神性と政治性が魅力的に一体化した、心動かされる物語である」<sup>2</sup>。ロペスは『シャングリラの囚人』の中で、他の紛争地帯や難民にはないチベット特有の状況（「苦境」）をこのように述べている。しかし、このポジティブなイメージがなぜ「苦境」なのだろうか。

チベット人は「成功した難民」と言われている。これには主に2つの側面がある。1つは、難民発生から現代にいたるまで、欧米諸国がチベットに対し関心と好感度の高さを維持し続けていること。2つ目は、この関心の高さが実際の経済的物質的援助に直接結びつき、個人からコミュニティ、チベット仏教の寺までが多大な支援を受けているという点である。欧米諸国のチベットに対する関心は、難民流出の原因が、欧米にとって無視できない中国という大国の政策にあり、しかもダライラマの亡命が、共産政権による宗教弾圧だととらえられているという点にも由来する。2008年の北京オリンピックにおける聖火リレーで、パリ市役所に人権弾圧抗議の横断幕が掲げられたり、リレー妨害に対して非難めいた報道がほとんど見当たらなかったのは、このような背景によるものである。しかし、チベットに対する支持が、そのようなパワーポリティクスの結果だけだとしたら、ロペスの主張するような、他の難民にはない「苦悩」は説明できない。チベットの「問題」は「異国情緒と精神性と政治性のブレンド」にあり、前者の2点こそが、かくも長期にわたって欧米の支持を集めてきた理由でもある。

<sup>1</sup> 一橋大学大学院社会学研究科地球社会専攻博士課程 leosh21@yahoo.co.jp

<sup>2</sup> Lopez, Donald S. *Prisoners of Shangri-La: Tibetan Buddhism and the West* Chicago/London: The University of Chicago Press (1998) pp.11

ロペスの論考の表題にもなっている「シャングリラ」に基づくチベットのイメージ形成については、すでに何人かの研究者が言及している。たとえば、漫画、映画、小説、広告、ポスター、パンフレットなどに描かれたフィクションとしてのチベットを分析したブラウエンによれば<sup>3</sup>、大衆向けに描かれてきたチベットは、理想郷というよりもむしろ風変わりで不恰好、常識では考えられない荒唐無稽な夢の国のイメージにあふれている。1959年、ダライラマの亡命とともにチベット難民が欧米にも渡り、チベットは単なる想像上の世界から、環境、平和、非暴力という西洋現代の不文律と結びついて、具体的な姿が見えるようになってきた。しかしブラウエンによれば、1933年に出版された『失われた地平線』によって急速に広まった空想上の「シャングリラ」<sup>4</sup>の時代から、難民流出後の「ダルマラ」の時代に移行しても、フィクションと現実の堺はなお明確ではないという。在外チベット人社会で幅広く執筆活動を行っているジャムヤン・ノルブは、チベット亡命政府の重要な仕事のひとつは、西洋のイメージを流用して、ダライラマ亡命以前のチベットを平和で調和的で精神性に富む国であったと宣伝することであり、またチベット難民自身もチベットの外部にあって、自分たちの失われた故郷に対して、西洋が作り出したシャングリラのステレオタイプイメージを、徐々に重ねるようになってきたと指摘する<sup>5</sup>。シャングリラのイメージは、現実生活しているチベット人とはかけ離れているが、しかし必ずしも西洋だけの空想ではなく、在外チベット人自身の空想の中にも見出せるというのである。ロペスもまたチベット難民自身が良きチベット・イメージを流布してきた点に触れている。彼によれば、チベット仏教<sup>6</sup>には常に両極端のイメージがあった。「素朴で汚されていないものと墮落したもの、真正なものと模倣したもの、聖なるものと悪魔的なもの、良きものと悪しきもの。この対立は『西』と『東』、『西洋』と『東洋』というヨーロッパとアジアの関係の歴史を通して機能してきた」<sup>7</sup>。実際のチベットは必ずしも外界から閉ざされた理想郷ではなく、近隣との関係から生じる複雑な内情を持っていたが、ステレオタイプ化された言葉の繰り返しによって、そのイメージが本質化してきた。これらの言葉は難民となったチベット人が流用、展開し、良きチベットの姿は亡命政府によって推進され、もう一方の悪しきチベットの表象は、チベットを中国の一部に組み込むためのキャンペーンとして中国

---

<sup>3</sup> Brauen, Martin *Traumwelt Tibet -Westliche Trugbilder* Bern/Stuttgart/Wien : Verlag Paul Haupt(2000).

<sup>4</sup> ブラウエンは西洋とチベットの関係性を3つの時代に分けて考察している。第一期は宣教師や学者によって描かれた「シャンバラ」の時代。20世紀の最初の四半世紀がこれに相当する。第二期は『失われた地平線』が出版された1933年から、ダライラマが亡命した1959年まで、欧米で空想上のチベットが盛んに描かれた「シャングリラ」の時代。そして、1959年以降、実際のチベット人僧侶が欧米に渡り、仏教を広める「ダルマラ」の時代である。

<sup>5</sup> Jamyang Norbu “Tibet in film, fiction and fantasy of the West” in *Tibetan Review* Vol.XXXIII No.1(1998) pp.21

<sup>6</sup> チベットとチベット仏教は表裏一体の関係にある。チベット仏教は宗教の一つとみなされるが、これは西洋によって名づけられたもので、かつてのチベットにおいては政治、学問、医学、慣習など日常のあらゆるものと結びついた「文化」そのものでもあった。

<sup>7</sup> Lopez, *ibid.* pp.4

政府によって専有されているのだという<sup>8</sup>。過去の良きチベットのファンタジーはチベットの独立に対しての支持を集めたが、しかしその実現化に対しては大きな脅威になるであろうとロペスは述べている<sup>9</sup>。なぜ支持と脅威は同時に存在するのだろうか。チベット難民の「成功」の理由の2つ目から、その答えを導くことができる。

## 2. シンボリック・キャピタル

他の難民と同様に、チベット人も国境を越えた後には、まず生活基盤を整えることが最大の課題であった。彼らの生活もまた難民キャンプからはじまった。しかし、東西冷戦のさなかの1959年に、中国からヒマラヤを越えてインドに現れた難民の存在は欧米の注目を集め、国際機関の他にもスイスをはじめアメリカ、イギリス、ノルウェイなどの難民救援組織がネパールでチベット人の救援活動を行い<sup>10</sup>、その報道によって一般の関心も高まっていった。スイスは難民発生の翌年には、いち早く移民として集団での受け入れを決定し、ベルリンの壁が築かれた2ヶ月後に到着した難民の第一陣の様子は逐一報道された。『チベットの7年』<sup>11</sup>のような本が、スイスの人々にヨーロッパの外からののはじめての難民に対する心構えを作り（中略）共産主義の犠牲者という当時の政治的空氣が、歓迎の気持ちをさらに高めた<sup>12</sup>。スイスでは、チベット難民は難民でありながら賓客のようであったと言われているが、実際にチベットの貴重な文化を守るという名目で、本格的なチベット僧院建設にはじまってさまざまな支援が寄せられた<sup>13</sup>。ロペスが指摘したように、まさに政治性と異国情緒が魅力的に一体化した、心動かされる物語が展開したのである。アメリカでは60年代70年代に盛んであったニューエイジ・ムーブメントの中でチベットの精神性（spirituality）に傾倒する人々が現れ、そのブームが下火になっても、チベットへの関心は生き残って広がっていった<sup>14</sup>。

こうした背景の中で、チベット人は他の難民に比べ、より多くの経済的援助を受ける機会に恵まれたが、中でも特筆すべきは個人から個人へのスポンサーシップが、在外チベッ

---

<sup>8</sup> Lopez, *ibid.* pp.10

<sup>9</sup> Lopez, *ibid.* pp.11

<sup>10</sup> Lindegger, Peter *40 Jahre Tibeter in der Schweiz: Versuch einer ersten Bestandesaufnahme für die Jahre zwischen 1960 und 2000* Zürich: Tibet Institut Rikon(2000) pp.89-90

<sup>11</sup> Harrees, H *Sieben Jahre in Tibet: Mein Leben am Hofe des Dalai Lama* (1952) オーストリアの登山家によるこのチベット滞在記は、一般向けの「チベット本」としては、ヒルトンの『失われた地平線』以来のヒットとなり、1997年に *Seven Years in Tibet* というタイトルで、登山家とダライラマの交流を描いたハリウッド映画になった。この本と映画が胃ちっと・イメージに及ぼした影響については、

<sup>12</sup> *Vom Dach der Welt :Tibeter in der Schweiz* Hrsg. Albers+Fuchs(in Zusammenarbeit mit Welwoche) Zürich (2003) pp.8

<sup>13</sup> 僧院建設の経緯に関しては、Lindegger, Peter *20 Jahre Klösterliches Tibet-Institut Rikon/Zürich* Zürich: Tibet Institut Rikon(1998)、Jacques Kuhn *Warum ein tibetisches Kloster in Rikon?* Tibet-Institut Rikon Schriften Nr.10 など。また、チベット難民受け入れには、スイス人家庭への養子縁組も多かったが、「文化の根絶やしという批判の砲火を浴びた」(Lindegger, P *40 Jahre Tibeter in der Schweiz* pp.35)

<sup>14</sup> Korom, Franz J. “Tibet und die New-Age Bewegung” *Mythos Tibet :Wahrnehmungen, Projectionen, Phantasien* Köln: Dumont (1977) / (English version) “The Role of Tibet in the New Age Movement” in *Imagining Tibet : Perceptions, Projections & Fantasies* Boston: Wisdom Publications(2001) 参照。

ト人の約 9 割を占めるインド、ネパールの難民社会のインフォーマル・エコノミーになっていったという点である。インド在住のチベット人は約 8 割が失業状態にあると言われており、欧米からの個人的スポンサーシップが非常に大きな経済的基盤になっている。筆者が亡命政府の所在地であるインドのダラムサラに滞在したときも、数人のチベット人からスポンサーになってくれないかと懇願された。レシピエントの多くは子供と僧侶だが、大人も決して例外ではなく、中には一家全員が異なるスポンサーから援助を受けていたり、一人で複数のスポンサーを持つ例もあった。筆者が知り合った人々は、自分たちのスポンサーを「アメリカのお父さん」「スイスのお母さん」と呼び、たとえ年齢が近くても「擬似的親子関係」を意識においていた。スポンサーからは毎月の金銭的援助だけでなく、誕生日などに有名メーカーのスニーカーなどが贈られ、受け手であるチベット人は日常生活を記した手紙や、特に子供の場合は絵や作文などをスポンサーに送っていた<sup>15</sup>。プロストはチベット語で *rogs ram* と呼ばれるこのスポンサーシップについて、ブルデューを援用しながら、エコノミック・キャピタルに乏しい難民にとっては、チベットにまつわるさまざまなシンボリック・キャピタルが重要な役割を持つ点を指摘している<sup>16</sup>。このスポンサーシップは単に難民を経済的に援助するだけではなく、チベットの豊かな精神性を維持し、伝統を守り、また難民として貧困であることに対して供されるものであり、援助を受け続けるために、チベット人は常にその要求に答えていく義務があるのだと述べている。プロストは経済性が隠蔽されたこの関係を通し、両者はチベットのサバイバルの「プロジェクト」へ参加しているのだと述べる。理想的な「シナリオ」は、渡ったお金が政治的な、またスピリチュアルな使い方によって「浄化」されることで、これは「ロペスがすでに述べたように、宗教的禁欲に優れたチベット人へのロマンティックな愛着」<sup>17</sup>によるものであるという。プロストは、仏教に対するスポンサーシップは個人の場合と異なる面が多いことを指摘するが、海外での布教を通して広がる僧侶への援助<sup>18</sup>が、一般のチベット人に対する考え方にも影響を及ぼし、「ロペスや他の人々が強調するように、多くの外国人は、僧や尼僧が持つとされるスピリチュアルで道徳的な美点をすべてのチベット人にまで広げて考えている」<sup>19</sup>と指摘している。

難民であるということ、またチベットにまつわるさまざまなイメージは、シンボリック・

---

<sup>15</sup> 欧米人に限らず、欧米に暮らす在外チベット人もインド在住のチベット人のスポンサーになっている場合がある。しかし、その場合は「カナダの〇〇さん」のように名前で呼んでいた。スポンサーは仲介の組織を通して、また雑誌に掲載されて募集される。たとえば、「スイス・チベット友好協会」が発行する雑誌では [http://www.tibetfocus.com/ta/ta\\_96.pdf](http://www.tibetfocus.com/ta/ta_96.pdf)

pp.14-15 のような形で個人スポンサーが募集される。

<sup>16</sup> Prost, Audrey “The Problem with ‘Rich Refugees’ Sponsorship, Capital, and the Informal Economy of Tibetan Refugees” in *Modern Asia Studies* No.40 (2006)

<sup>17</sup> *ibid.* pp245

<sup>18</sup> 欧米諸国へ渡った僧侶への援助のみならず、彼ら自身が窓口になって、自分たちの出身地の僧院、あるいは欧米での布教活動を通して得た資金で新たにインドやネパールに築いた僧院で生活する僧侶へ援助を行うケースが多い。彼らは欧米各地に展開する仏教センターを基点にして、個人対個人のスポンサーシップを募ったり、NGO を立ち上げたりしている。

<sup>19</sup> *ibid.* pp249

キャピタルとしてチベット人に大きな利益をもたらしているが、しかし利益を受け続けるためには、シンボリック・キャピタルが要求するイメージから離れることができない。これは、単に *rogs ram* のレシピエントである個人の問題だけではなく、布教によって多くの欧米人信者を持つチベット仏教の組織、コミュニティ、政治団体にまで及ぶチベット全体の問題でもある。このチベット全体を包み込むシンボリック・キャピタルは、欧米に遍在する一連のチベット・イメージであり、チベット人がそれを体現するときに、エコノミック・キャピタルへの変換が可能になる。プロストは、難民コミュニティに流入する経済が、シンボリック・キャピタルを基盤にする限り、エスケープできない依存のサイクルを形成すると述べる<sup>20</sup>。また在外チベット人のシャキヤは、シャングリラに代表されるチベットのイメージが政治活動に支障を来すと主張し<sup>21</sup>、ギャツォは、それがチベットの生々しい現実を覆い隠していると指摘している<sup>22</sup>。シンボリック・キャピタルとしてチベットの「成功」を支えている一連のイメージは、同時にチベット人を囚われの身にしている。これが冒頭で引用したチベットの「苦境」である。そしてロペスはさらに続けて「私たちは自分たちが作った監獄に囚われている。私たちは全員、シャングリラの囚人である」と述べ、囚われの身はチベット人だけではないと主張する<sup>23</sup>。

チベットに対するイメージの歴史的、文献的研究、またポピュラー・カルチャーにおける表象研究についてはすでに蓄積がある<sup>24</sup>。ここでは、欧米で毎年開催されるイベントを取り上げ、現代ヨーロッパがチベットに何を見出しているのか（見出したいのか）について考えてみたい。

### 3. The Dalai Lama in Hamburg 2007

2007年7月20日から27日までの1週間、ドイツのハンブルクでダライラマの説法を中心に、チベットと仏教をテーマとした大きなイベントが開催された<sup>25</sup>。主会場のローテンバ

---

<sup>20</sup> *Ibid.* pp251

<sup>21</sup> Shakya, Tsering “Tibet and the Occident: The Myth of Shangri-La” in *Tibetan Review* Vol.XXVII No.1(1992) pp.13

<sup>22</sup> Brauen, Mrtin *ibid.*pp.259

<sup>23</sup> Lopez *ibid.* pp13

<sup>24</sup> この問題は1989年に出版された Bishop. Peter の *The Myth of Shangri-La: Tibet, Travel writing, and the Western Creation of Sacred Landscape*、1994年の *The Buddhist Review* 紙に掲載された Shakya Tsering “The Myth of Shangri-La”, Lopez, Donald “New Age Orientalism: The Case of Tibet”などで注目されるようになった。1996年には、当時の西ドイツのボンで「知と愛」というタイトルのチベット芸術展が開催され、3ヶ月で10万人以上の入場者を数えた。その展示会の開催期間中にボン大学の主催で3日間にわたり、チベットのイメージや「魅力」に関するシンポジウムが開かれ、その記録は翌年 *Mythos Tibet: Wahrnehmungen, Projektionen, Phantasien* Köln:Dumont (1997) として出版された。また、前出の Ropez, Donald *Prisoner of Shangri-La* (1998), Brauen, Martin *Traumwelt Tibet* (2000)でも、さまざまな視点から検証されている。

<sup>25</sup> 組織委員会は1979年に設立されたハンブルク・チベット（仏教）協会 *Das Tibetische Zentrum e.V. Hmburg* である。ハンブルクにはこの他にチベット仏教センターが8グループ、韓国仏教1、タイなどのテラワダ仏教が7、ベトナム仏教が2、禅道場が5、「伝統仏教」にルーツを持たない「西洋仏教」が1、合計24の団体がある。チベット協会はこのイベントのために *Tibetisches Zentrum Event GmbH* という有限会社を立ち上げた。またチベット仏教ではない他のグループも大会の記録などの面で組織委員会に参加した。

ウム・テニスアリーナには連日約 1 万人の入場者があり、そのほかにも大学、博物館、映画館など市内各所に副会場が設けられ、人気のある催しものはチケットの入手が困難になるほどの人気を呈した。

欧米でのダライラマによる大規模な催しはこれが初めてではない。1981 年、アメリカのウィスコンシン、マディソンからはじまって、すでに 10 回ほど「カーラチャクラ・イニシエーション 世界平和のために」という約 12 日にも及ぶ催しが行われ<sup>26</sup>、そのほかにも同規模の大会がヨーロッパ各所で開催されてきた。カーラチャクラとはイスラム教徒に追われた仏教徒が平和な理想世界シャンバラを実現するという内容をもった儀礼で<sup>27</sup>、インド・チベットの密教では最後に出現した聖典に由来する。かつては歴代ダライラマが生涯に一度だけ行う秘儀であったが、現在のダライラマがインドに亡命する直前に不穏な情勢のラサで 2 回続けて執り行ったことがきっかけになり、亡命後もインドでしばしば行うようになった。チベットのどこか架空の地に、争いのない平和な理想郷を出現させるという秘儀の研究は、欧米のチベット学者の間で盛んに行われるようになり、またインドで実際に行われている儀礼に注目した人々が、欧米にもダライラマを招聘し、「世界平和のために」という名目をもって、回を重ねて行われるようになったのである。2005 年のチューリヒと 2007 年のハンブルクではカーラチャクラという宗教色が排され、期間も 1 週間に短縮されて、ダライラマの説法を中心とした「チベットの祭典」という形式がとられた。

### 3-1 平和を学ぶ

主会場でのダライラマによる説法は、初日午前 9 時半から 11 時半、午後 2 時から 4 時、2 日目の午前 9 時半から 11 時半の合計 6 時間が、「平和を学ぶー非暴力の実践」というタイトルで、また 2 日目の午後は「グローバル化する世界における共感」というタイトルで開催された。3 日目から 7 日目までは、「悟りへ至る道 その修行のための 400 の詩節」というアールヤデーヴァのテキストの仏教哲学講義であった。チベット語からの翻訳は、ドイツ語、英語、フランス語、イタリア語、スペイン語、中国語、ベトナム語<sup>28</sup>の計 7 ヶ国語で行われた。チケットは「平和を学ぶ」が 80 ユーロ（約 1 万 2 千円）、公開講演が 25 ユーロ、

<sup>26</sup> 欧米でのカーラチャクラは 1981 Madison, Wisconsin, USA, 1985 Rikon, Switzerland, 1989 Los Angeles, USA, 1991 New York, USA, 1994 Barcelona, Spain, 1996 Sydney, Australia, 1999 Bloomington, USA, 2002 Graz, Austria, 2004 Tront, Canad で開催された。カーラチャクラの名前をつけない催しは最近のものだけで、2005 Zürich Switzerland, 2007 Hanburg, Germany, 2007 Milano Italy, 2008 Nantes France, 2009 年には Frankfurt で開催予定。

<sup>27</sup> 田中公明 『時輪タントラ』（カーラチャクラ）への導き『仏教』  
クンチョク・シッター「チベットにおけるカーラチャクラの実践」『仏教』

<sup>28</sup> ドイツには約 11 万 5 千人のベトナム移民がおり、そのうち約 6 万人が仏教徒である。1991 年にはハノーバーにベトナム仏教のパゴダが建立されたが、これは現在のところヨーロッパで最大の仏教寺院である（cf. Baumann, Martin “Zwei Buddhismen Geschichte und Gegenwart buddhistischen Lebens in Europa” in *Herder Korrespondenz* 56 Jahrgang Heft 8 (2002) pp.426）イベントにはドイツ、近隣諸国から多くのベトナム人が訪れた。イベント開催にあたっては、ハンブルク・ベトナム仏教協会（Vietnamesische Buddhistische Gemeinschaft）が協賛した。

仏教哲学講義が5日間の通しで225ユーロ、1日券が55ユーロであった。しかし、初日、2日目の講演に関しては1ヶ月前には完売で、仏教哲学講義も当日券を入手するために長い行列にならなくてはならなかった。収益がどのように配分されるのかについての情報は得られない。しかし、ダライラマを通して何がしか亡命政府にもたらされるならば、国家のないチベットにとってこの毎年のイベントは経済的に重要な機会であろう。プロストは上述の *rogs ram* が、かつてのダライラマとモンゴル皇帝とのパトロン・クライアント関係のアナロジーとして語られることに注目する。つまりこれを現代に敷衍すれば、「経済的なスポンサーシップは宗教的支えと交換されるが、それはチベット人のスピリチュアルな教えが、西洋の実存的空白を埋めるために求められる」<sup>29</sup>からであり、西洋とチベットは、精神的宗教的支えというシンボリック・キャピタルを仲介にした現代的なパトロン・クライアント関係にあるということである。モンゴルとチベットの関係は「主従関係」として、チベットにとってはあまり引き合いにだされたくない部分とされるので、いささか皮肉な見方ではある。しかし、チベットの歴史を知る者にとって、現代の西洋との状況は個人的なスポンサーシップであれ、仏教を通じた関係であれ、かつてのモンゴルとの関係を連想させるものがあるのである。

「平和を学ぶ」のテーマは、第一日目の午前が「仏教哲学—精神の本質について—仏教の精神はいかに共感と非暴力を醸成しうるのか」、午後は「日常の倫理について—日常生活で非暴力を実践することや憎悪の気持ちを変えるにはどうしたらいいのか」、そして第二日目は「平和のビジョンについて—世界的な責任とわれわれが個人として世界平和に貢献できること」であった。この3回の講演にはそれぞれコメンテーターがつき、ダライラマとディスカッションを行った。9人のコメンテーターのバックグラウンドは次のとおりである。司会役になったのは、テレビプロデューサー、インタビューアー、作家などを兼業する52歳の男性。コメンテーターは、精神科医でハイデルベルク大学の心身関連研究所、家族セラピー研究所の所長を務め、家庭内暴力の予防について研究する57歳の男性。イエズス会の神父で禅の指導者でもあり、政治と経済における意識形成の研究センター設立や「イェルサレム—世界平和の学習のための都市」プロジェクトなどにかかわる70歳の男性。ハンブルク大学の教育学と宗教教育学教授で、「対話における世界宗教」学際研究センター所長を務め、多文化社会における青少年、宗教、教育についての研究と社会活動を行う62歳の男性。ジャーナリストで移民女性のための統合教育の教師も務める52歳の女性。地域教会の牧師でハンブルクの社会奉仕活動団体の責任者、ホームレスに関する雑誌「誰も彼も」(*Hinz & Kunst*)の編集者を務める57歳の女性。平和、正義、人間的成長、環境、人権、健康などにかかわる緊急性のある問題に対し模範的な解答を見出した人に、「もうひとつのノーベル賞」を贈る団体を設立した63歳の男性。ベルリンに本部を置く南東ヨーロッパ文化協会事務局長で、ユーゴスラビアからの難民のトラウマに対する問題に取り組み、戦争や放逐によって生じた憎悪や敵意を鎮めることを目的に「苦難を乗り越える架け橋」基金を設立

---

<sup>29</sup> Prost *ibid.* pp248

した 59 歳の女性<sup>30</sup>。そして「われら英雄」という名のグループのシンガーソングライターをしている 33 歳の女性である。講演の様子はハンブルク 1 チャンネルで中継され、新聞は連日大きな写真つきで公演の様子を細かく報道した。講演会場にダライラマが入場する様子は *Die Welt* 紙で次のように報じられた。「朝のそよ風の中にはためく色とりどりの祈禱旗。風は布に書かれたマントラの聖なる言葉を世界へ運んでいこう。チベットはここハーヴェストヒューズで、もう手が届くところにある。朝 8 時。あと 1 時間もすれば法王ダライラマ 14 世は、巨大な黄色いカーテンをその手で開け、慎重な足取りで舞台に現れ、革製のアームチェアに素足であぐらをかいて座る。白いテント屋根の下にいる約 1 万人 5 千人の人々が立ち上がる。ぱらぱらとした拍手が聞こえるが、誰も歓声をあげない。参加者によれば、多分彼はそういうことを望んでいない。『彼はポップスターなんかじゃないんだよ』と誰かがささやいた」<sup>31</sup>。会場は収容人員約 1 万 5 千人のアリーナで、当日はテニスコートの上にカーペットを敷き詰めたフィールド席（主に僧侶に優先的に割り当て）も満杯で、開場間際には近隣の地下鉄駅からすぐには出られないほどの混雑であった。舞台は高さ 10 メートルくらいの、全体が黄色で中央部が紺色のカーテンがかけられ、それをバックにして中央に階段つきの臙脂色の「玉座」がしつらえられていた。カーテンにはタンカと呼ばれる巨大な仏画が 3 枚掛けられていた。この背の高い「玉座」と後背の色鮮やかな仏画は、ダライラマが謁見や説法など公の場に出るときの伝統的スタイルで、世界的に人気を博した「セブンイヤーズ・イン・チベット」などダライラマが描かれた映画や絵、写真などを見たことのある人にとっては、まさにチベットが手の届くところに来ているという印象を与えたであろう。事前に注意のアナウンスやパンフレットでの説明はなかったが、新聞記事にあったように、ダライラマの入場と同時に開場が静まり、一般席から見下ろせるフィールドにいる約 250 人の僧侶<sup>32</sup>の所作の通りに、見る限りほとんどの人が両手をあわせて頭をさげた。キリスト教とは異なる宗教の指導者に手を合わせるという行為は初めてという人も多かったと思うが、このような身体的所作を通して、単に本を読んだり CD で説法を聞くのと違って、チベットの「儀礼」に参加しているという臨場感も高まる。

同じ「チベット仏教」といってもチベット人の生活の中にあるものと欧米に広まっているものとは当然大きな違いがある。後者の場合、たいてい「言葉」から入ってくる。新聞や雑誌にはダライラマや仏陀の「言葉」が聖書の箴言のように見出しに使われ、絵葉書や

<sup>30</sup> Bosiljka Schedlich. 「世界平和のための 1000 人の女性」の一員で 2005 年のノーベル平和賞候補になった。

<sup>31</sup> *Die Welt*, 22. Juli 2007 Welt am Sonntag HH1, “Eine Heiligkeit für die Massen“

<sup>32</sup> 会場にはさまざまな国の僧侶が来ていた。僧衣の異なる僧侶にインタビューしたところ、筆者が話を聞いただけでも、ベトナム、韓国、台湾、ビルマ、インドネシア、法輪功、スリランカ、ビルマ、カンボジアの仏教僧がいた。ほとんどはヨーロッパ在住ということであったが、必ずしも国と人が一致するわけではなく、韓国人のチベット仏教僧、ドイツ人のビルマ仏教僧などさまざまであった。キリスト教の聖職者が国や地域に関係なく存在するように、それぞれの国や地域に端を発した仏教の「トラディション」がその地域を越えて「信者」を得たり、またダライラマの説法に小乗仏教の僧侶が参加していたり、必ずしも教義や地域に細分化されているわけではなく、キリスト教やイスラム教に対して「仏教」というひとつの宗教

採用のカレンダーには、草葉の先端に光る朝露とか水に映る月影などの写真を背景にして、それらの言葉が書き記されている。本屋や駅の売店の入口で、当地の絵葉書と並んでこれらの絵葉書が回転式のショーケースに入って売られている場合が多いので、目にとめている人も多いはずである。また、本屋では店頭の目立つところに、ダライラマの本や CD が平積みされていることが多く、ここにも「言葉」が宣伝用に並べ置かれている。ダライラマの説法会場に来た人々の中にも、これらの「言葉」からチベットやチベット仏教に関心を持った人々も多かったのではないかと筆者がインタビューした数十人のほとんどは、どこかで目にした「言葉」に触発され関心を持ったと語ったし、またフランクフルター・ルンドschau紙には、講演2日目の「グローバル化する世界における共感」の会場に来ていた女性へのインタビューが2面に渡って掲載されているが<sup>33</sup>、そこでも「欲すものを手にいれないことは、しばしば大きな僥倖である」というダライラマの言葉が記された絵葉書で「人生観が変わり」、会場へやってきたと書かれている。健康や精神的充実に関する言葉と同時に、現在ではこの講演会のタイトルにあるように、「非暴力」「平和」「共感」がチベットを修飾する、あるいはチベットという名から発せられるキーワードになっている。チベット仏教センターはしばしば「健康の家」<sup>34</sup>というもうひとつの名称がついて、プジャ（仏教的礼拝の儀礼）のような仏教的実践だけではなく、セラピストやチベット医学によるヒーリングとセットになっていることが多い。外的平和（世界平和と非暴力）と内的平和（精神の健康）は一体となってチベット仏教の「教え」の2つの大きな柱になっている。新聞で紹介された女性は「キリスト教的人間観も内的平和を約束している」「しかしそれ以上のものではない」「自分は宗教が必要なのではない」「仏教は意図された方法ではなく、無意識のうちに導いてくれるものだ」<sup>35</sup>という感想を語っている。チベットとチベット仏教は内的にも外的にも、何か善きものを体現し、理屈や方法ではなくそれを実現に導く力があるというイメージが作られているようである。ダライラマという宗教指導者の説法は、両者を容易に一体化し、そのイメージ生成の強力なバックグラウンドになっている。

### 3-2 映画

主会場で行われたダライラマの講演と説法の他にも、付随するチベット関連のイベントが市内各所で行われた。おもな会場は映画館、ハンブルク大学、ハンブルク民族学博物館で、そのほかにルドルフ・シュタイナー・ハウス、青少年音楽学校などが会場として使われた。映画<sup>36</sup>はイベント開催期間だけではなく、6月3日の *Der 14. Dalai Lama. Ein Leben*

<sup>33</sup> Frankfurter Rundschau 28.Juli 2007 Nr.173 Panorama24,25

<sup>34</sup> たとえば、ドイツフライブルクにあるチベット仏教センターは、仏塔完成法要にダライラマを招聘したほどの本格的なチベット仏教「寺院」であるが、パンフレットなどに記載される名称は“Das Gesundheits-Haus Tibet Kailash Haus”（健康のためのチベットカイラシュハウス）であり、チベット人僧による不定期な法要や説法の他には、仏教哲学講義や毎夕の仏教礼拝、チベット医学に基づくマッサージ、サイコセラピー、健康法などの定期的なコースが設けられている。

<sup>35</sup> Frankfurter Rundschau 28.Juli 2007 Nr.173 Panorama24,25

<sup>36</sup> 映画のタイトルは上映時の表記通り、英語のものは英語で、ドイツ語に翻訳されているものはドイツ語

*für Tibet* 「ダライラマ 14 世—チベットのための人生」<sup>37</sup> *Im Reich des Löwenthrons. Das verborgene Reich des Dalai Lama* 「獅子の玉座の王国で—ダライラマの隠された王国」<sup>38</sup>を皮切りに、7 月末日までのべ 38 本のチベット関連のドキュメンタリーと映画が上演された。イベント開催期間中には上演されたのは上記 2 本の他に、*Geheimnis Tibet* 「チベットの秘密」、*Flucht tibetischer Kinder über den Himalaja* 「ヒマラヤを越えたチベットの子供たち」、*Angry Monk* 「怒りの僧侶」、*Im Griff der roten Kaiser* 「赤い帝国の手中にあって」、*Kekexili - Mountain Patrol* 「ココシリ」<sup>39</sup>、*Das Wissen von Heilen* 「幸福の智」、*Tuyas Ehe* 「トゥヤーの結婚」<sup>40</sup>、*Dreaming Lhasa* 「ドリーミング・ラサ」、*A Long Way to Freedom - The Tibetan National Uprising Day* 「自由への長い道のり」、*Chinas Tibet?* 「中国のチベット？」の合計 10 本である。「幸福の智」はチベット医学を扱ったドキュメンタリー、また「トゥヤーの結婚」「ココシリ」は日本でも上映されたチベットが舞台の中国映画で、上映前には行列ができるほどの人気であった。他には「怒りの僧侶」をのぞいて、中国の一部になったチベットの現状をチベット人側の視点で描いた政治色の強い作品が多かった。映画のコーディネートをを行ったのは映画館とハンブルク・チベット仏教協会、そしてチベット・イニシアティブ・ドイツランド<sup>41</sup>というチベット支援団体で、それぞれの上映前にはゲストを招いて映画解説などを行ったが、数本の映画では中国のウイグル族女性活動家レビヤ・カディールが壇上にあがり、中国における少数民族の弾圧や、ウイグル人と同じ立場にあるチベットの支援を訴えるスピーチが行われるなど、政治色の強い演出が行われた。「怒りの僧侶」は、ダライラマ亡命以前のチベットで、当時の封建制や形骸化した仏教の問答などに疑問を抱いた実在の僧侶の葛藤と旅の経験を描いた作品で、チューリヒ大学附属民族学博物館でビジュアル・アンソロジーの講座を持ったことのある人類学者 Luc Schaedler が監督を務めた。チベットのシャングリラ的なイメージはことごとく排され、ダライラマ亡命以前のチベット生きた一人の学問僧が、いかにチベットの「現実」に苦悩し新しい世界に憧れたかという部分を描いている。理想郷でもなく、犠牲者の側面を強調した政治色の強い作品でもないためか、館内が満席になることはなかった。しかし、この作品だけ期間中に 2 回上映された。この映画の 1 回目の上映の前には特に解説がなく、尼僧による経典の朗誦があった。チベット仏教の声明は男声の低音が特徴で、尼僧による高音の朗唱は、最近になってヒーリング音楽として人気を博しているものである。2 回目の上映時にはレビヤ・カディールが中国における人権問題を訴え、また館内では “Secretary of the Tibet Autonomous Regional Party Committee Zhan Qingli”、“The President of the

---

で記した。

<sup>37</sup> Dok. von Albert Knechtel, Autorin: Thea Mohr

<sup>38</sup> Dok. von Günter Myrell, Autorin: Thea Mohr

<sup>39</sup> 2004/中国 監督・脚本 ルー・チューアン。日本での上映タイトルは「ココシリ」。

<sup>40</sup> 2006/中国 監督 ワン・チューアン、脚本 ルー・ウェイ、第 57 回ベルリン国際映画祭<金熊賞>受賞作品。

<sup>41</sup> ドイツ国内に向けてチベット文化の保護や環境、人権問題についてアピールすることを目的に 1989 年に設立された。特定政党とのつながりをもたない。

People's Republic of China Hu JINTAO” という宛名を記した葉書が配られ、1ユーロの切手を貼って自分の住所氏名を書き投函するように求められた。葉書には「酷刑止歩」などのアピールが書かれ、おもに英語で政治犯釈放を求める声明が記されていた。入館者は葉書を一応受け取ったが、レビヤ・カディールに話しかける人もなく、チベット問題に特化しない政治的演出は、あまり効を奏しているとは思えなかった。

### 3-3 民族学博物館

民族学博物館ではイベント期間中、「チベット仏教の宝」「砂曼荼羅」の二つの特別展が開催され、そのほかにも日替わりでさまざまな催しが行われた。「チベット仏教の宝」展は博物館収集品の仏像や仏画、儀礼祭具の展示が主で、毎日、学芸員解説付きの大人向けと子供向けのツアーが行われた。大人向けツアーの解説は主に仏教の歴史や仏像、仏典の種類、意味などであったが、筆者が参加した時は、仏画の性的描写に対する質問が多く出て、コースの時間は予定の倍近い2時間を費やした。筆者が調査しているスイスの数か所の仏教センターでは、心の在り方、生き方、健康、環境問題、世界平和などについての説法が中心で、仏画に描かれている性的結合の意味などは、知る限り話題にのぼったことはない。たぶん、欧米に広まっているチベット仏教の場では、性的部分は切り捨てられているのではないかと思われる。なぜなら、それはかつてラマ教と呼ばれていたころのイメージを喚起させるものがあり、チベットやチベット仏教にまつわる両極端のイメージの負の部分につながるからである。しかし学芸員に聞いたところ、このような話題に関心が集まることは今回のツアーだけのことではなく、時には現実離れた過去のイメージを現在のチベットに重ねる人もいるということであった。60年代、70年代のニューエイジ・ムーブメント以来、かつて「西洋的観念」で「墮落」と捉えられていたものも、人間の自然の在り方のひとつと考えると、チベット・イメージの肯定的な面に統合されてきているが、一般にはなお以前のラマ教と呼ばれたころのイメージも濃厚に残っているということであろうか。

民族学博物館では、展示のほかに、講義とワークショップ「チベット式ヨガ」<sup>42</sup>「チベット僧院における絵画表象」、旅行記録のスライドショー「チベットへの道」、コンサート「チベットの影響を受けた世界の音楽」「インド音楽」、実践指導「チベット瞑想法入門」、欧米を中心に広く信者を持つカルマ・カギユ派の僧侶リング・トゥルク・リンポチェ<sup>43</sup>による講演「チベットーダライラマの歴史的役割とチベット仏教におけるカルマ派」などが行われた。リング・トゥルク・リンポチェの講演は開始の1時間前には長蛇の列ができて、203席の講義室は開場を待たずに入場制限が行われたほどであった。講演は必ずしも演題に沿

<sup>42</sup> *Tibetische Heilbewegung* 適訳がないのでヨガと記したが、心身ともに健康を目指す身体の動かし方、リラックス方法のこと。チベットの伝統的な身体技法ではないが、最近、ヨガにならってさまざまな方法が考案されているようである。講義ではチベット医学の理論との関連性などが述べられた。

<sup>43</sup> *Ringu Tulku Rinpoche* 1952年東チベットのカム地方の生まれ。rigul 僧院の僧院長の転生といわれる。難民として1959年からシッキム、インドで暮らし、1990年より欧米に出て異宗教間対話などの活動に参加。著作多数。出身地の寺院を援助する団体を作っている。cf. <http://www.rigul.org/> 欧米にはこのように自身の出身地の寺院を経済的に支援する基金を作る僧侶が多い。

った内容ではなく、いわゆるトークショーで、ギター演奏が入り、大変な盛り上がりであった。僧侶は表情豊かで、冗談を飛ばし会場を笑わせ、ときに仏教の難解な単語を交えながら、「愛する心とは」「満たされた日常とは」「本当の自由とは」「チベット文化を救うには」など1時間半ほど語り続けた。壇上にいる人物がチベット仏教の僧衣をまわってなければ、欧米のエンターテインメントのような雰囲気であったが、帰りがけに参加者の意見を聞いたところ、「チベット文化がよく理解できた」「チベットの伝統に触れて感動した」という意見が多く聞かれた。現代におけるチベット・イメージの生産は、このように欧米で説法を行う僧侶によるところも大きい。

### 3-4 ハンブルク大学

民族学博物館のほかには、おもにハンブルク大学を会場にして、チベット仏教あるいは欧米の大学の学位を持つ僧侶・尼僧による講演会が開かれた。これらは民族学博物館での催し物よりも、「学問的」色彩をもつものであったが、入場者数は民族学博物館を上回り、10ユーロの当日券を手に入れるために、1時間以上並ぶこともしばしばあった。中でも人気を博したのは、ダライラマのフランス語通訳者であるマチュ・リカールの「チベットー愛の目で」<sup>44</sup>、リカールとマインツ大学哲学・神学教授トーマス・メッツィンガーによる「科学と仏教」であった。リカールは60年代にチベット仏教の僧に弟子入りし、その後僧籍に入り、仏教と他の学問、特に科学との対話を目的にした“Mind and Life Institute”<sup>45</sup>を活動の場にしてきた。その仕事は、チベット仏教の自然観と量子力学の類似性、瞑想の医学的有効性などについて、単に事例を述べるだけではなく、ダライラマと科学者を公開の場で対談させてそれを出版するというものである。2005年にチューリヒで、“The Dalai Lama 2007 in Hamburg”と同様の1週間にわたるダライラマの説法が行われたが、彼はそのときチューリヒ大学で開催されたダライラマと脳神経学の専門家とのシンポジウム<sup>46</sup>、またスイス連邦工科大学で開催されたシンポジウム「怖れと不安」<sup>47</sup>にもかかわった。両方の催しは

<sup>44</sup> リカールの北部インド旅行時の写真のスライドショー。一般にはあまり知られていないヒマラヤの「秘境」スピティで、チベット仏教の教えそのままに生きているという人々の日常について解説した。伝統、素朴さ、スピリチュアリティがキーワードであった。

<sup>45</sup> Life and Mind dialogue は1987年インドのダラムサラで第一回目を開催したのを皮切りに、その後も哲学、物理学、脳神経科学、認知心理学などの分野の学者とダライラマとの対話をコーディネートしてきた。その記録はすべて出版されて、英語、フランス語、ドイツ語、スペイン語、中国語、日本語などに翻訳されている。

<sup>46</sup>“Neuroscience Symposium mit seiner Heiligkeit dem Dalai Lama” シンポジウム出席者はダライラマの他、チューリヒ大学脳神経生理学教授 Kevan Martin (座長)、仏教哲学を専門とするチベット人僧侶 Thupten Jinpa Langri、スイス多発性硬化症医学協会会長でチューリヒ大学講師神経科学講師の Jürgen Kasselring、音楽による脳の生理学を研究し、現在チューリヒ大学に脳神経科学の講座をもつ Lutz Jänke、チューリヒ大学分子精神医学教授 Roger, M Nisch、チューリヒ大学情報科学教授で人工知能研究ラボラトリー所長の Rolf Pfeifer であった。

<sup>47</sup> スイス連邦工科大学150周年記念行事の一環として行われた。マチュ・リカールは自身このシンポジウムのディスカッサントをつとめた。他の出席者はダライラマの他に、スイス連邦工科大学化学、応用生物科学教授の Hans Möhler、カトリック司祭の Eugen Drewemann、チューリヒで精神分析を行っている Arno Gruen、ヨーロッパ行動認知療法協会 (European Association for Behavioural and Cognitive

夏休み中であつたにもかかわらず、大学構内の各所に設けられたおよそ 5000 の座席は事前の申し込みで満席になり、その模様は新聞、テレビなどで細かく報じられた。このような活動は、チベット仏教と科学を直接結びつけ、かつてオリエンタリズムで想像されてきた、外部の宗教にまつわる一種のいかにわしさを払拭するための大きな力になっており、またチベット仏教と科学的思考の類似性ばかりでなく、科学だけでは解明できない部分を「仏教の智」に求めるといった一種の西洋近代批判にもなっている。大学教授という肩書をもつ科学者とダライラマの対話を直接見ることでこれらの行事は、チベット仏教になじみの薄い人々にも深い印象を与える契機となる。チベットは単に神秘的で平和な理想郷であるだけでなく、西洋が推進してきた最先端の科学にも影響を及ぼす知を持っているというイメージがこのようにして形成されていく。リカールとメッツィンガーの講演では「私という意識とは何か」という問題が取り上げられた。メッツィンガーは本質的な自己というものはなく「透明な自己のモデル」(transparentes Selbstmodell)があるだけであり、自己が幻想だということも誤った考え方だという主張を展開し、リカールは瞑想が脳に及ぼす影響、特に共感能力や思慮深さを深めるために有効であることが科学的に立証されたという話をした。これらはリカールが推進する科学と仏教の対話の中でも、もっとも一般に好まれるスピリチュアリティの科学的意味付けに関するもので、抽象的な内容ながら多くの聴衆を集めた。

大学での講演は、この他にハンブルク・チベット仏教センターのチベット人僧侶、ゲシェ・ペマ・サムテンの「共感—仏教のこころ 内なる幸福と外部とのハーモニー」、アメリカ人のチベット仏教尼僧テュブテン・チョルドン<sup>48</sup>による「怒りを飼いならす」、タイ人の尼僧ダマナンダ<sup>49</sup>による「小乗仏教における女性の位置」、アメリカ人のチベット仏教尼僧で、サンディエゴ大学教授のカルマ・レクシェ・ツォモ<sup>50</sup>による「仏教における強き女性たち」、イギリス人のチベット仏教尼僧テンジン・パルモ<sup>51</sup>による「実践としての人生」、ジュ

---

Therapies, EABCT) 前会長で、現在バーゼル大学心理学研究所局長の Jürgen Margraf、弁護士で 90 年代にスイス連邦議会議員と議長、またヨーロッパ評議会とヨーロッパ安全協力機構 OSZE のスイス代表をつとめた Gret Haller であった。

<sup>48</sup> 70 年代に、欧米に展開するチベット仏教の組織では最も大きなもののひとつである大乘仏教普及財団 (FPMT) 創設者のラマ・イエシェ、ゾパ・リンポチェから教えを受け尼僧になった。彼女のホームページ (<http://www.thubtenchodron.org/>) から、西洋人チベット仏教僧侶・尼僧の活動内容の一端を知ることができる。

<sup>49</sup> 尼僧としての名前は Bhikkuni Dhammanada。本名は Chatsumarn Kabilsingh で 30 年にわたりカナダのマクマスター大学と、タイのタマサート大学で教鞭をとってきた。2001 年にスリランカで受戒した。2007 年現在、タイで唯一の尼僧院である Songdhammakalyani 僧院の僧院長をつとめている。タイは 30 万人の僧侶がいると言われているが、尼僧はめずらしい存在である。彼女は僧侶になったあと、タイ国内でさまざまな社会的不利益を受けてきた。スイスにあるチベット仏教僧院には、タイでは尼僧になることが難しいので、スイスでチベット仏教の尼僧になった人もいる。

<sup>50</sup> Karma Lekshe Tsomo。専門は仏教における生命倫理、仏教の西洋社会への適合、平和構築など。尼僧の国際組織であるサキヤディータ・インターナショナル Sakyadhita International の代表もつとめる。講演は宗教上の自己決定における女性の権利や、尼僧が社会における女性の平等をいかに推進できるかという内容であった。

<sup>51</sup> Tenzin Palmo。60 年代にチベット仏教の尼僧となったが、西洋人女性では初めてとも言われている。

ネーブにあるチベット亡命政府ヨーロッパ代表事務所の所長ケルサン・ギャルツェン<sup>52</sup>とドイツ・キリスト教民主・社会同盟 (CDU/CSU) の国会議員ハイバッハとの対談「チベット問題を考える」、またギャルツェンと次の4人、ウイグル世界会議の代表レビヤ・カディーール、代表なき国民国家機構<sup>53</sup>の事務代表マリオ・バスダチン、チベット国際キャンペーン・ヨーロッパ支部<sup>54</sup>代表のジャンパ・ツェリン、ラオガイ・リサーチ・ファウンデーション<sup>55</sup>のハリー・ウーによる対談「人権なき大国—中国」、そして「チベット医学」であった。この中で特に人気を博したのは「チベット医学」で、チベット医学の処方に基づく薬品を製造販売しているスイスの製薬会社パドマ<sup>56</sup>の主任研究員と、オーストリア、インスブルック大学の医薬品生化学教授が、チベット生薬の効能を科学的に説明し、実際にどのような症例にどのような処方があり、どのように有効なのか具体例を示したものであった。「チベット医学では、精神の働きが病気と健康を支配していると考え」「心と体は深い相関関係にある」「処方される生薬は部分に効くのではなく、全体を調和させることで全身の健康を推進する」という言葉が繰り返し述べられ、熱心にメモをとる聴衆もいた。

### 3-5 コンサート

その他にはコンサートと写真展が開催された。一番規模の大きなコンサートは、70年代にジャズ・ロック・グループ「マハビシュヌ・オーケストラ」で活躍したジョン・マクラフリンとインド音楽演奏で定評のあるザキール・フセイン、そしてシャクティ・グループによるチベット難民救済慈善コンサートであった。マクラフリンは60年代、70年代のニューエイジ世代を代表するアーティストの一人で、一時期ヒンドゥー教徒になり、ジャズ、ロック、インド音楽を融合させた独自の音楽を展開した。60年代、70年代はビートルズ、ビーチボーイズ、ドノヴァンなど欧米の有名アーティストがヒンドゥー教のグル（導師）のもとに出入りし、インドがヒッピーの「聖地」のようになったが、チベット人が難民としてインドやネパールに定住しはじめたのもちょうどこの時期であったため、ビートルズなどの影響を受けてインドを旅行した欧米の人々の中には、チベット亡命政府が置かれた北インドのダラムサラやネパールを訪れ、チベット人僧侶に弟子入りした人もおり、そのような人々が中心となって欧米にチベット仏教センターが開設されていった。当時そのような「東洋趣味」は若者文化として特殊な位置にあったが、ダライラマの説法もこのコンサートもかなりの年配者から若い人々まで、聴衆に年代の偏りがなかったところをみると、

<sup>52</sup> 移民としてスイスに住む。ダライラマの個人秘書、中国とチベット亡命政府の交渉窓口役などを務める。「チベット問題を考える」では、ドイツの人権問題への取り組みを俎上にあげた。

<sup>53</sup> Unrepresented Nations and Peoples Organization (UNPO) 事務代表 Mario Busdachin

<sup>54</sup> International Campaign for Tibet Europe 代表 Jampas Tsering

<sup>55</sup> Laogai Research Foundation (中国強制労働・労働改造所に対する調査などを行っている) 代表 Harry Wu。

<sup>56</sup> 1960年代にポーランド在住のチベット医学医師(チベット人)と出会ったスイス人 Kehl Lutz が設立。チベット生薬を研究製造し、欧米12カ国に輸出している。ポーランドに住んでいたチベット人医師一家の物語は *Journeys with Tibetan Medicine* というタイトルで映画化された。60年代のスイスはチベット難民を移民として受け入れた時期であり、チベットへの関心が高まっていた。

ニューエイジ世代に端を発した「東洋趣味」も現在では特殊な志向ではなくなり、ひとつのライフスタイルのように欧米の人々の生活に溶け込んでいるともいえるだろう。たとえばシタールなどインドの楽器を取り入れた音楽は、現在では、ヒーリングを目的としたニューエイジ・ミュージックとも呼ばれ、幅広い層に受け入れられている。在外チベット人の中には音楽活動をしている人も少なくないが、彼らのほとんどはこのジャンルで活躍している人たちである。同日、別会場でスイス在住のチベット人デチェン・シャクータグセイ<sup>57</sup>と尺八演奏家ユルク・ツアミューエによる「癒しの響き」というコンサートが行われたが、デチェンもこの分野で活躍している一人である。デチェン・シャクータグセイは1989年にスイスのミュージシャンとともに「菩薩心」(Bohdicitta) というタイトルのCDを出して以来、ベルナルド・ベルトルッチが監督をつとめ、坂本龍一が音楽を担当した映画「リトル・ブッダ」の挿入曲の新バージョンをレコーディングするなど、チベット仏教をテーマにしたヒーリング音楽の歌手として活躍してきた。このコンサートでも”Chenresi, Flame of Peace and Compassion”、”Dewa Che, Universal Healing Power of Tibetan Mantras”、”Shi De, A Call for World Peace”、”Dcham Sen” (共感する心) など、癒し、世界平和、他者への共感などをテーマにした持ち歌を尺八の伴奏をつけて歌った。両方のコンサートとも、”The Dalai Lama in Hamburg 2007”の一環として開催されるという宣伝は特にされていなかったため、必ずしもチベットや仏教に関心のある人々が集まったわけではなく、普通のニューエイジ・ミュージックのコンサートのつもりで来た人も多かったかもしれないが、実際にはダライラマの催しの一部であるために、ヒーリング音楽の合間にダライラマの言葉が引用され、チベットと平和と癒しの結びつきが繰り返し語られた。マクラフリンのコンサートの帰り道、筆者の前を歩いていた数人のグループが60年代にヒットしたフォークソング「花はどこへ行った」を口ずさんでいた。ドイツでは、マレーネ・デートリヒが1962年にこの曲をドイツ語で歌って以来、一般に広く知られるようになり、東西冷戦、デートリヒの帰還など時代のイメージとともに記憶に残る歌になっている。アメリカのように反戦の歌として流行したものではないと聞くが、第二次大戦中アメリカに渡ったデートリヒが帰還してドイツ語で歌った衝撃、東西に分かれた国土など、敗戦国ドイツの、戦争や対立に対する心の痛みを彷彿させる歌でもある。

コンサートはその他に、スイス在住のチベット人、ローテン・ナムリンによる「チベット伝統音楽の夕べ」とチベタン・ユース・アソシエーション<sup>58</sup>が主催した「ラップ・フォー・チベット」(”Rap for Tibet”)が開かれた。ローテン・ナムリンは大きな体躯と浅黒い

---

<sup>57</sup> Dechen Shak-Dagsay. チベットから難民としてインドにやってきた僧侶 Dagsay Rinpoche の娘で、1965年、3歳の時に家族とともにスイスへ移住。1999年にオーストリア Polyglobe Music より CD “Dawa Che: Universal Healing Power of Tibetan Mantras”を出して以来、チベット仏教のマントラを歌詞に取り入れ、ヒーリング、世界平和などをテーマにしたCDを毎年出している。

<sup>58</sup> Verein Tibeter Jugend in Europa (VTJ) (英語名 Tibetan Youth Association in Europe) スイスのチューリヒに本部があり、主に街頭でのデモンストレーションやストリート・ミュージックなどを通じた政治的活動を行っている。”Rap for Tibet”は2005年にチューリヒで開催されたダライラマの説法のとくに初めてVTJのキャンペーンとして行われ、以降チベットの人権と自由を訴えて4回ほど開催されている。

肌に白い顎鬚、白髪交じりの長髪を束ね、チベット風の、しかし時にはどこのものとも特定できない民族衣装風の服に織柄の大きなショールを肩からかけ、チベットの弦楽器をつま弾きながら眉間に皺をよせて泣き出しそうな表情で「伝統歌謡」を歌い上げる。彼はチベット問題を題材にした政治的風刺画の描き手でもあるが、音楽そのものに世界平和とか他者への共感のようなメッセージを込めることはなく、「失われゆくチベットの伝統」あるいは「失われた祖国」を全身で演じているように見受けられる。スイス、ドイツ、フランスなどを中心にコンサート活動をしているが、最近ではヨーロッパにとどまらずロシア、アジア、アメリカへもツアーに出ている。時に舞台の後背に大きなチベット国旗を掲げて「失われた祖国」チベットの伝統歌謡を歌う様子は、直接政治的な内容に言及する以上に政治的メッセージを伝える効果を持っている。

### 3-6 写真展

写真展「平和への旅」はスイス人写真家マニュエル・バウアーの作品を集め、イベント期間を含め約1ヶ月半にわたって開催された。バウアーはチベットの写真を18年にわたり撮り続けてきたが、この7年間はダライラマの日常に密着して、公式の場だけではなく瞑想場面など私生活を撮影し、いわば「素顔のダライラマ」の記録を目指してきた。糸車を廻すガンディーの写真が念頭にあったというバウアーは、単なる絵としてのダライラマではなく、未来に解釈の余地を残す映像ドキュメントを撮りたかったという<sup>59</sup>。バウアーの写真展はスイス各地で開催されてきたが、「平和への旅」にも出品された数枚、インドの僧院でダライラマが盲目の老人の頬に手をあて、口づけするポーズをとった写真<sup>60</sup>、また宿泊先のオーストリアのホテルのベッドの上で、ランニングシャツ姿で瞑想する写真は、写真展のポスターや雑誌のダライラマ紹介記事などで、筆者がスイスに滞在申しばしば目にしてきたものである。チベットに関心を抱いたきっかけは政治問題だったとバウアーは語っているが、中国と対立関係にあるチベットの指導者の瞑想場面や「弱者」へのいたわりの場面をモノトーンで見せる彼の作品は、チベットと非暴力を強力に結びつけ、印象づける役割を果たしている。

### 3-7 出会いの広場

主会場のテニス・アリーナの外には仏教やチベット関係の書籍販売所、チベット仏教センターや人権団体などのブースを集めた「出会いの広場」、また仏像や仏画を展示した「休息の空間・静寂の力」が設けられた。書籍販売場は「チベット」「一般」「平和」「ダライラマ」「入門」「実践」「深化」の7つのコーナーに分かれており、「ダライラマ」コーナーには、彼の写真を表紙にした本がドイツ語版だけで約50種類、またそれを上回る種類のCD、DVDが並んでいた。ダライラマ本のサブタイトルは「人間性の力」「共感・広い心」「透明

<sup>59</sup> cf. ドイツの雑誌 *GEO* のインタビュー "Das ist ein grosses Geschenk"

<http://www.geo.de/GEO/fotografie/3961.html?p=1&pageview=&pageview=>

<sup>60</sup> <http://www.geo.de/GEO/fotografie/portfolio-des-monats/54055.html?t=img&p=5&pageview=>

なる精神」「内なる平和への道」「悟りに至る道」「智慧の言葉」「平和の書」「幸福へ至る仏教の教え」「人生の深い理解」「共感と思慮」「世界の平和と心の平和」「大胆な発想—ドラマと科学者との対話」「原子の中の世界—仏教と科学の旅」「赦免の智慧」などで、主に処世訓・人生論、平和・非暴力、仏教と科学の対話に大別される。出版社<sup>61</sup>は仏教、ヒンドゥー教、ヨガ、スピリチュアリティなどの本を中心にしているところから、実用書中心の出版社、また 19 世紀半ばの創業で神学、心理学、教育の専門書を扱うところまでさまざまである。英語の場合は「スノーライオン」などチベット関連書籍専門の出版社があるが、ドイツにはそれに匹敵するチベット専門の出版社はない。チベット仏教関係の本は、仏教センターがそれぞれ出版部を持っているので、そこから仏典のドイツ語訳やチベット仏教の実践方法、人生論などが相当数出版されている。

「出会いの場」に集まったブースは「ドイツ仏教協会」、ドイツ各地に展開するチベット仏教センターなどの仏教関連団体の他には、「アムネスティ・インターナショナル」(“Amnesty International”)、「キャンペーン・フォー・チベット」(“Campaign for Tibet”)、「ドイツ・チベット支援協会」(“Deutsche Tibet Hilfe e.V”) などの人権擁護、政治的支援に関連する団体、また北インドにあるギュト寺チベット仏教大学に病院を建設するための資金援助を行う「ローター・ロータス」<sup>62</sup>、チベット仏教のドリクン・カギユ派が自身の僧院、学校建設を行うために立ち上げたプロジェクト「ロートス・ゼー」<sup>63</sup>、ヒマラヤ地帯で学校・病院建設、環境問題、景観保全などを行う「カイラシュ協会」<sup>64</sup>、スイスに本部がありチベット、インド、ネパール在住のチベット人のための学校と病院建設、難民の個人的スポンサーを募る「ノーラ」<sup>65</sup>、中国四川省(チベット)のダルジェ地方での僧院と学校、病院建設、僧侶へのスポンサーを募る「タシ・ダルジェ」<sup>66</sup>などの NGO 組織、その他には、ハンブルク大学で 2007 年 11 月に開催された異宗教、異宗派間対話「第二回国際祈りの会議 2007」<sup>67</sup>、預金を環境保護関連の事業に投資する GLS Bank<sup>68</sup>などであった。チベット

<sup>61</sup> Herder, Diederichs, Scherz, Theseus, Piper, Lübke など

<sup>62</sup> “Roter Lotus”ドイツ人医師夫婦が「貧困の中の貧困を救済するため」に私財を投じて設立した団体。主にチベット亡命政府のあるダラムサラ周辺で病院建設を行っている。

<sup>63</sup> “Lotos See e.V” 欧米に展開するチベット仏教団体の中には、チベット文化の継承を訴えて自分たちの僧院建設の資金集めを行うためのプロジェクトを立ち上げるケースも多い。このようなプロジェクトは、インド、ネパール在住の在外チベット人僧侶の生活の援助にもなっている。

<sup>64</sup> “Kailash e.V”。ブースではラダック地方に建設中の「世界の屋根の学校」に対する寄付を募っていた。この学校の理念は「自分たちの文化、宗教、伝統に基づく自己像の形成。この基盤の上に立って、西洋の科学と技術、言語を習得する」というものである。学校の施設だけを作るのではなく、教育内容も支援の対象となっている。

<sup>65</sup> “Norlha”。チベット、ネパール、インド在住のチベット人に対する支援団体。都市部から離れた場所での初等教育、病院建設などをめざす。

<sup>66</sup> “Tashi Dargye e.V”。ダルジェはチベット自治区ではなく四川省にあるが、チベット人は四川省の一部を「チベットのカム地方」と呼ぶ。ハンブルク・チベット仏教センターを率いる僧侶ゲシェ・ペマ・サムテンはこのダルジェ地方の出身であり、一度難民としてインドに行った後、再び当地に戻り数年間ダルジェ僧院の僧院長をつとめた。このように、欧米に移住し、仏教センターの中心的役割を果たしている僧侶が、出身地の僧院を経済的に援助する例は多い。

<sup>67</sup> “Internationaler Kongress GEBET 2007” 主催者は、多文化社会ドイツにおける新しい価値観を模索するという非営利団体「日常の倫理協会」“Ethik im Alltag e.V”。2007 年のイベントはハンブルク大学と

難民への資金援助に関しては、主会場内でも主催者のハンブルク・チベット仏教協会がチベット難民支援<sup>69</sup>のブースを開設し、「仏教的伝統を体現し伝えていく」人々への個人的なスポンサーを募っていた。援助の金額は「タシ・ダルジェ」の場合、一人につき1か月15ユーロ、ハンブルク・チベット仏教協会の場合は成人僧侶、尼僧には1か月19ユーロ、子供の僧侶には11ユーロ、図書館、コンピューター関係の職員、新生児には25ユーロを送金する<sup>70</sup>。どこのブースでも写真入りの小冊子が用意され、通りかかる人に配布されていたが、支援を訴える冊子にはたいてい「中国におけるチベット文化の破壊」「難民による文化の継承」という説明書きがあり、個人への支援を通して、チベット文化全体の保護と継承に寄与できるという印象を与えている。

以上が“The Dalai Lama in Hamburg 2007”の概要である。次にこのイベントから、現在チベットがどのようなイメージと結びつき、それが在外チベット人社会にどのようにかわるのかという点について考察する。

#### 4. チベットを支えるモラル・エコノミー

ダライラマの説法と付随するイベントを総覧して、そこで取り上げられたテーマ、参加した人々のバックグラウンドなどからキーワードを取りあげると、平和、非暴力、人権、幸福、癒し、環境、心身の健康、伝統の保持などになる。これらはまさに現代の西洋が追及してやまない「価値」であり、現代における「シャングリラ」であるとも言える。ヒマラヤの想像上の理想郷は、現在では西洋に場所を変え、実際に移住してきたチベット人とその「宗教」に見出されている。ダライラマに人気が集まるのは、仏教への傾倒であるというより、彼がこれらの「価値」の象徴とみなされているためであろう。2007年7月3日、4日にドイツで行われた宗教意識に関する調査（世論調査会社による無作為1000人のへ質問）によると、「どの宗教を最も平和的なもの感じるか」という質問に対し、仏教43%、キリスト教41%、イスラム教1%、また「ダライラマとベネディクト14世のどちらが宗教者として好ましいか（手本となるか）」という質問に対しては、ダライラマ44%、ベネディクト14世42%、無回答10%であった<sup>71</sup>。亡命以前と同様、現在でもダライラマはチ

---

共催された。28の講演があり、入場料は2日間70ユーロであったが、約600人が聴講に訪れたという（主催団体の記録）。

<sup>68</sup> ドイツの大手銀行 Volksbank、Reiffeisenbank と同じグループに加盟している。他の銀行と異なる特徴は、投資信託の対象を倫理・環境関連企業に絞っている点で、この趣旨に賛同する人を預金者として募っている。

<sup>69</sup>1977年以來、難民個人と僧侶個人への支援窓口になってきた。特にチベットでは最大級の僧院であったセラ寺のインドでの再建とそこに住む僧侶への支援、また新たな尼僧院の建設を行い、配布されたパンフレットによれば、現在まで総額で約300万ユーロを集め送金している。

<sup>70</sup> 配られたパンフレットには、個人への送金ではなく、事業全体に対し1か月12ユーロ、23ユーロ、3か月69ユーロ、半年138ユーロ、一年276ユーロの支援が選択できると記載されていた。

<sup>71</sup> *Der Spiegel* Nr.29 2007.7 pp.87 このような調査結果がある一方で、当然、ダライラマの人気に批判的な声も存在する。たとえば、1999年に出版された *Der Schatten des Dalai Lama-sexualität, Magie und Politik im Tibetischen Buddhismus* (Victor Trimondi, Victoria Torimondi 1999 Patmos Verlag: Düsseldorf) は800ページを超える「大著」で、チベット仏教の呪術的性格などが批判されている。しかし、1996年にハンブルクの St.Ottilien 修道院に設立された“Europäisches Netzwerk

ベットの政治と宗教の中心であり、ダライラマへの関心はチベット仏教とチベット全体への関心に結びつく。現在、チベット仏教センターは、町の小さな集会所も含めると、ひとつの「教団」がドイツだけで132<sup>72</sup>もの支部を持つ場合もあるほどに、欧米の各所に点在している。もしチベットやチベット仏教に関心があれば、気軽に訪れることができる上に、それらのセンターではたいてい瞑想教室や呼吸法、心理セラピー、仏教哲学などのクラスがあるので、宗教的な実践に抵抗のある場合でも参加できるようになっている。筆者が訪れたドイツ、スイス、オーストリアのチベット仏教センターには、どこも”The Dalai Lama in Hamburg 2007”の会場や「出会いの広場」で配られていたような、チベット難民個人と、僧院をはじめとする「チベット文化」の保護継承のための援助を求めるチラシやポスター、パンフレットが例外なく置かれ、そこに記載された説明文には、上記のキーワードが必ず入っている。チベット仏教は80年代以来、禅に代わって仏教の中でも支持の幅を広げており<sup>73</sup>、仏教とチベット仏教が同義で語られることすらある。全世界に散在するチベット人は約11万1千人<sup>74</sup>しかいない。ひとつの宗教と結びつく人数としては少数である。彼らはチベット仏教、ときには一般的に仏教全体を体現するものとして、また現代的「価値」の象徴として、さまざまな支援を受ける機会を得ている。それは無国籍の難民が単に経済的な基盤を得るばかりではなく、「チベット」という社会的存在を継続させるものでもある。国家なき人々の個々人の生活支援、「文化の維持継承」、病院、学校、福祉などのインフラ整備が、ハンブルクでのイベント全体を通してみられるようなキーワードをシンボリック・キャピタルとして行われる。そしてこれらの支援は経済的側面だけではなく、チベットへの漠然とした近親感とつながって、「チベット」という存在を支えているのである。

プロストは在外チベット人の個人的な支援に対して、贈与と商品に対立させる従来の考え方では説明ができない点を指摘する<sup>75</sup>。彼女は、贈与と商品をわけて考えることに疑問を投げかけ、その背後にある共通性を見出そうとしたアパデュライに賛同する。グーデマンはアパデュライを援用して「経済は贈与と商品の対立ではなく、コミュニカルな価値とコマーシャルな価値が連結した領域で形成される」<sup>76</sup>と述べたが、プロストは在外チベット人への支援はこの視点から理論的に考察されるべきだと述べている。しかし、プロストの議

---

Buddhistisch-Christlicher Studien“「仏教、キリスト教研究ヨーロッパネットワーク」など、キリスト教側からの異宗教間対話の申し入れなど、仏教とキリスト教の歩み寄りの風潮が仏教への近親感を増し、ダライラマ人気に拍車をかけているのも事実である。

<sup>72</sup> カルマ・カギユ派の場合、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツを中心に世界で約450のセンターを持ち、そのうちドイツが132を占める。このような「教団」の支部のほか、どの「教団」にも属さず、個人が開いているセンターも多くあり、ドイツの場合、中規模程度以上の都市にはたいてい数か所のチベット仏教センターがある。

<sup>73</sup> Baumann, Martin “Zwei Buddhisten Geschichte und Gegenwart buddhistischen Lebens in Europa” in *Herder Korrespondenz* 56Jahrgang Heft8 (2002) pp.425

<sup>74</sup> 在外チベット人の中の僧侶の割合について、明確に記した資料はないが、インドに再建された「セラ寺」だけで約3700人の僧侶がいる。

<sup>75</sup> Audrey Prost “The Problem with ‘Rich Refugees’ Sponsorship, Capital, and the Informal Economy of Tibetan Refugees” in *Modern Asia Studies* No.40(2006) pp.244

<sup>76</sup> *ibid.* pp245

論は支援する側からの、伝統やスピリチュアリティへの「贈与」と「投資」に限定されており、それを受ける側の難民は、支援する側の期待を裏切ることができない受動的存在として描かれている。しかし、上述したような国家なき「チベット」の維持と継続は、支援する側の働きかけだけで成り立つものではない。たとえ個人的なスポンサーシップであっても、シンボリック・キャピタルをめぐる両者の複雑な交渉過程で成り立っており、プロストの議論では難民の側の生存をかけた能動性を解明することができない。この点を考慮し、さらに両者のインフォーマル・エコノミーを通じた相互関係をより詳細に分析するために、モラル・エコノミーの概念を援用することが有効であると考えられる。

モラル・エコノミーは、E.P.トムソンによって、18世紀のイギリスの民衆暴動が、従来考えられていたような突発的な暴挙ではなく、民衆の規範意識に基づいた行動であり、後に主流となる市場経済原理（ポリティカル・エコノミー）と対立する経済原理であるとして提唱された概念である<sup>77</sup>。これに基づきスコットは、東南アジアの農民が植民地化による市場経済の導入によって、モラル・エコノミーがどのように変質し、それがどのように抵抗や叛乱に結びつくのか、農民の生存維持倫理はいかなるものか、その概念の分析を行った<sup>78</sup>。これ以降、農民独自の論理による経済活動の在り方、また主に18世紀、19世紀にヨーロッパで起こった民衆の暴動や叛乱の分析に、モラル・エコノミーの概念がしばしば援用されてきた。しかし、市場経済の枠組みには入らないインフォーマル・エコノミーは、必ずしも農民の慣習的経済や、資本主義以前の民衆の間にだけ見られるものではなく、現代の国際関係においても、たとえば「高所得国が重債務低所得発展途上国に対する開発援助債券を削減したり放棄する動きが強まっているが、そこに市場関係をこえて共生を求めモラル・エコノミーに通じるもの」<sup>79</sup>もあり、さらに広げればNGOの活動なども、このようなインフォーマル・エコノミーの立場から分析ができるであろう。また、スコットがこの研究は「経済の領域で始められるが、農民の文化と宗教の研究で終わる」<sup>80</sup>と述べているように、単に経済だけではなく広く社会秩序や文化を包括するものでもある。

このような点からチベットの場合を考えると、2つの側面でモラル・エコノミーの概念を援用できるであろう。ひとつは在外チベット人の社会的、経済的生存維持の方策として、もうひとつはチベット人も含めた欧米在住の人々による援助活動、またチベット仏教を仲介にした資金の流れである。この2つは援助を受ける側とする側であるが、両者は必ずしも別のものではない。たとえば、ハンブルクのイベントの主催者はドイツ人が運営するハンブルク・チベット仏教協会であるが、指導者はチベット人僧侶であり、彼らは援助の主体でもあり客体でもある。欧米に展開する仏教センターを通じた支援も、その教団が立ち

---

<sup>77</sup> Thompson, E.P. "The Moral Economy of the English Crowd in the Eighteenth Century" in *Past & Present* 50: 76-136 (1971)

<sup>78</sup> Scott, James C. *The Moral Economy of the Peasant Rebellion and Subsistence in Southeast Asia*, Yale University Press (1976) (スコット、ジェームス C 『モラル・エコノミー 東南アジアの農民叛乱と生存維持』 訳・高橋彰、勁草書房 (1999))

<sup>79</sup> *ibid.* (日本語版「訳者あとがき」) pp301。

<sup>80</sup> *ibid.* Preface pp.vii

上げた NGO は支援者であるが被支援者でもある。これらの仏教センターは、その「本部」となる寺院をインド、ネパールに建立し、その付属施設となる病院、学校、また僧院で生活する僧侶個人への支援をまず第一に行うが、寺院と施設の充実が仏教センターの拡大と結びつき、センターの指導者となる欧米在住のチベット人僧侶の生活の基盤を作る。センターの規模が拡大すれば、支部が増えてチベットへの支援も増大し、寺院のみならず一般のチベット人へも波及していく。また、インド、ネパールの僧院教育が充実すると、英語が堪能なエリート僧が増えて、欧米への説法行脚に出やすくなり、そこで成功し信徒を得ると独自の仏教センター開設につながっていく。そして、その仏教センターは、またチベット支援のブランチとなる。チベットとチベット仏教はダライラマを中心とした同心円であり、欧米でのイメージも両者は分かちがたく結びついている。欧米各地で毎年開催される„The Dalai Lama in Hamburg 2007“のような大きなイベントを通して周知される肯定的イメージが、チベットへの支持と理解を広める推進力にもなり、さまざまな支援の機会を増やしていくのである。チベットのイメージは、理想郷のシャングリラから西洋の現代的「価値」を反映したものに推移したが、在外チベット人も西洋もそのイメージの囚われの身になっていることは本論の冒頭で述べた通りである。しかし、現実のチベット人は「シャングリラの囚人」というネガティブな言葉から連想されるような静態的、受動的な存在ではなく、その「苦悩」を個人と社会の生存維持に転化するシステムを作り出している。彼らの生存をかけたモラル・エコノミーが、いかに「西洋」のモラル・エコノミーを引き出していくのか、「シャングリラの囚人」の動態的側面を分析する必要がある。

モラル・エコノミーという言葉は本質的なモラル（道徳、倫理）と結びつくイメージがある。しかし、筆者がこの言葉を用いたのは、援助する側の貧者救済の本質的な道徳性や、援助を受ける側の「独自の文化」に対する執着を念頭に置いたからではない。援助する側は何を「モラル」と考えるのか、それはチベット・イメージに付随する現代的「価値」とどのように結びつくのか、なぜチベットにそのような「価値」が集中するのか、また援助を受ける側は何を生存の最重要の課題としているのか、両者のずれから何が生じるのか。むしろそのような点が重要である。実際、援助する側の「論理」は文化的—伝統的な文化のみならず、現代のチベット文化と目されている非暴力や仏教的スピリチュアリティなど、経済的支援にあるが、受ける側は文化的生存を主題にしながら、実は社会的、経済的生存を重視している。社会的生存と文化の維持継承はしばしば重ねて考えられるが、両者は異なるものである。社会的存在は「器」であり、表象と結びついて操作されるものではない。マイノリティの最も重要な課題は社会的に存在することであり、それにさまざまな文化的意味付けがなされるのである。

チベットの存在を支えるものは何か。筆者の大きな問いはここにあるが、チベットの現代的イメージがどのように広まり、作用し、どのようなモラル・エコノミーを形成し、人々はその中でどのように動くのか、さらに詳細な民族誌の中で検討していきたい。